印象形成に及ぼす敬称の効果

—顔写真および人物描写がある場合—

○菅村玄二¹・樋口隆太郎²・村上祐介²

(¹関西大学文学部・²関西大学大学院心理学研究科)

キーワード: 対人知覚, パーソナリティ, 身体魅力

The Effect of Japanese Honorifics on Impression Formation: Presented along with a Facial Image and a Character Description

Genji SUGAMURA¹, Ryutaro HIGUCHI², and Yusuke MURAKAMI²

(¹Faculty of Letters, Kansai University, ²Graduate School of Psychology, Kansai University)

Key words: social perception, personality, physical attractiveness

目 的

人間は世界を構成して生きる存在であるといわれる。人間は社会的動物である以上、他者をいかに知覚し、対人関係を構築するかは、生きていく上できわめて重要な意味をもつ。Bar et al. (2006) は、威嚇的な表情の写真は、0.039 秒のうちに威嚇的だと知覚されることを実験的に示し、第一印象を生存価値の観点から議論している。生物学的背景をもつ印象研究がある一方で、文化的な影響を論じるものも多い。たとえば、裕福なライフスタイルが描写された人物は、知的で、交友関係も広いと評価される一方で、思いやりがなく、正直さに欠くと見なされる (Christopher & Schlenker, 2000)。着用している衣服のブランドや、そのときの周囲の環境によっても、印象が変化するという報告もある (Fennis & Pruyn, 2007)。他にも、これまでに欧米を中心に、種々の要因が印象形成に影響を与えるという研究が数多く報告されてきた。

他方、日本では、欧米にない独自の文化として、人名の呼称に敬称の接尾辞を添えることが一般的であり、これが印象形成に何らかの影響を与えているかもしれない。たとえば、「さん」は敬意を表したり、場合によっては年齢の上下関係や性別を含意する。「くん」は子どもや若い男性を呼ぶ際や、年上の者が年下の者に対して、また対等な関係でも用いられる。「ちゃん」は何らかの親愛の情を表すとされる。

現実場面では、関係性や印象によって敬称が決まる側面が大きいと思われるが、本研究では、顔と人物描写を同一にした上で、名前に付ける敬称のみを変え、それを異なる群に提示することにより、敬称が印象形成に与える効果を検討する。

方 法

関西大学の1~3年次生245名(男性84名;女性161名;平均年齢:19.4)が調査に協力した。参加者には、3種類の質問紙のうちの1つがランダムに配布された。質問紙には、男性の顔写真(原島・苗村研究室作成の平均顔)がカラーで印刷され、その左に予備面接で判明した平均的な大学生の人物描写(下記)があった。参加者は15項目7件法のSD法を用いた質問紙で、その人物に対する印象評価を行った。

平中 健(あだ名:健○△)は、20歳の大学2年生。健○△は、オールラウンド系のサークルにたまに顔を出し、週に1, 2回はバイトをしています。健○△は、4年で卒業してできるだけよい企業に就職したいと思い、授業にはほとんど出席していますが、授業はそれほど熱心に聞いているわけではないという日々を送っています(※○△の箇所は、「さん」・「くん」・「ちゃん」のいずれかを挿入)。

なお、人物の姓は先入観の混入を避けるため、メジャーなものを避け、意味的に中立的なものにし、名はいずれの敬称と合わせても違和感のないものを選んだ。参加者の内訳は、「さん」群94名、「くん」群70名、「ちゃん」群84名であった(記入漏れのため3名除外)。調査時間は5分程度であった。

結 果

印象に対して、3種類の敬称と性差を要因とした2要因6水準の分散分析を行った。その結果、敬称の有意な主効果は認められず、「打ち解けたー堅苦しい」と「にぶいーするどい」の項目で有意傾向が生じるに留まった。また「女性的なー男性的な」の項目で、交互作用の有意傾向が見られ、男性における敬称の単純主効果に有意差が生じた($F[2,242] = 3.067, p < .05$)。Tukey法による多重比較の結果、5%水準で「くん」のほうが「さん」よりも有意に男性的と評価された。一部、有意な性差のある項目もあったが、性差は今回の研究の直接の目的ではないため、割愛することにする。Figure 1は、「さん」、「くん」、「ちゃん」の3種類の敬称それぞれの印象評価のSDプロフィールである。

Figure 1. Mean Profiles of Impression Ratings on the Semantic Differential Items among Three Different Japanese Honorifics.

考 察

敬称が違ってても、同一人物の印象は概して変わらないという結果になった。このことは、印象が写真や人物描写に影響を受けやすく、敬称のみの効果は小さい可能性を示唆する。一部の項目では有意傾向が生じたため、今後、サンプル数を増やすことにより、有意差が生じる可能性はある。しかし、得点差自体が小さいため、敬称が印象に与える影響は、いずれにせよ、決して大きくはないであろうと推測される。

日本では、儒教の影響から、対人関係は年齢の上下とも深い関わりがある。ゆえに、サンプル数を増やして、刺激の人物に対して、知覚者が、同年齢、年上、年下のそれぞれ場合の印象の違いも検討する価値があると思われる。今後は、顔写真や人物描写を省いた上で、同様の研究を実施することにより、異なる敬称が、いかなる場合に、どの程度、印象形成に影響を与えるのかを精査していくことが課題である。